



撮影協力：コーヒーとおやつの店 andMore(本町)

特集：新春座談会

若者に選ばれる かっこいい・魅力的な「塩竈」をめざして

今年の新春座談会は、本市の個性を生かしながら、若者が活躍できるまちづくりを進めるためには、行政として何ができるのか、本市にゆかりのあるゲストお二人をお迎えし、具体的なアイデアなど、ざっくばらんにお話いただきました。

市長 新年あけましておめでとう
ございます。今回は地元ゆかり
のある(株)東日本放送(以下、
「KHB」という。)の佐藤吉雄社長、
(株)ジー・アイ・ピー(以下「G・I・
P」という。)の佐藤寿彦社長にお
越しいただき、若者が塩竈に住み
続けたい、また塩竈に移り住みた
いと思っていただけるようなまち
をつくるために行政として何がで
きるのか、アドバイスをいただき
たいと思います。

深井 KHBの佐藤社長は塩竈市
のご出身、G・I・Pの佐藤社長も
20代のころ、塩竈市にお住まいで
あったと伺っております。また、
G・I・Pは9月に塩竈市で開催さ
れる「GAMA ROCK FEST」の企
画制作に携わっておられるほか、
東北で年間700本以上ものイベ
ントを主催されています。

最初に地元の報道機関、イベン
ト制作の専門家として、若者の活
動がまちの活性化に繋がっている
事例などを紹介ください。

佐藤(吉) 県内の自治体でマスコ
ミが多く取り上げているのは女川
町です。震災で全く別の場所にな
ってしまったところに、町外から
多くの若い人が移り住んでお店を
やったり、起業したりしています。
人口が減ってしまったので、どう
やって増やすか、テーマがはつき
りしています。



▲音楽、アート、食を楽しめる「GAMA ROCK FES」。
平成24年から毎年9月に開催されている。

それから、世田谷区のラジオ番組から生まれた「青二祭」というイベントです。これは高校生自らが運営する、学校の枠を超えた高校生文化祭で、地域活性化の域にとどまらず、一つのムーブメントになっています。

佐藤(寿) 若者という定義が難しいですが、当時若かった人たちが作り上げたものが、何十年と続いているものがあります。そういうものを作り出す土壌が塩竈にあってもいいと思います。

今年20周年を迎える弊社の「ARABAKI ROCK FEST.」は、現在46歳になる社員が26歳のころにアイデアを出して、今では宮城

県川崎町で6万人参加する音楽フェスになりました。弊社の若手社員たちが始めて、ずっと続けてきたから6万人を達成できたと思います。

塩竈も若い人たちが何かできるような「種」をまくことが、大事ではないかと思っています。

深井 「若者発！そして続ける」。一つのキーワードですね。

若者の定義ですが、本日の座談会では20〜30代と捉えています。現在塩竈市の総人口に占める割合は約18%で、10年前の22%から減少しています。

市長 平成15年から平成30年までに総人口が6500人減っています。どうやって若い人たちをつなぎとめるか、塩竈に来ていただくかが課題です。

議会の皆さんと相談して、子育てや教育など若い世代が関心のあ政策を重点的に進めていきたいと思っています。

佐藤(寿) つなぎとめるという感覚ではなく、「皆さん来てくださーい」と、新しいものを打ち出して、5年10年続けていかないと難しいと思います。

議長 女川町などは、若者たちが当事者意識を持って、まちを選び、継続してやっているのだと思います。

本市の場合、当事者がいない状

態になっているので、当事者を育て、定着できるような環境を作ることが必要だと思っています。

佐藤(吉) 問題は「何をやるかではなく、誰がやるか」です。若者の中核的グループが必要で、そのためには若者たちが情報共有できる場を作ってあげることが大切です。

「何をするか」の前に、「誰が」というグループを作ってあげることが外せません。

佐藤(寿) 私も会社を作って40年になりますが、行政は、何かやりたいという人の意見を聞いて、支援してあげる。そうすると、自然的に若者は集まってきます。

「塩竈らしさ」というかハチャメチャな部分を作った方が注目されると思います。

佐藤(吉) 仙台市の場合、人口は増えていますが、若者の首都圏への流出率は圧倒的に高いです。塩竈市は人口減少が進んでいるので、外から呼んでこないとは来ません。

その意味で、比較的知られているのは「寿司」です。知ってもらおうと思ったら、自分が持っている強みをプロモーションすることを考えないとうまくいきません。

市長 気付きが大事だと思っています。昨年、塩釜高校の生徒たちと懇談する機会がありました。ダ



▲「ESP DANCE PES2019」参加チームのダンスパフォーマンス
に会場は熱気に包まれた

ンス部の部員が80人いて、全国大会にも出場していると聞きました。公共スペースの活用など、行政としてできる発想で生徒たちを応援してあげられたら。という思いを感じて帰ってきました。

議長 例えば、地元の企業が地元高校のダンス部に自社スペースを貸して、全国大会で優勝する、というようなストーリーが出来ると思います。

市長 市長に就任して5カ月経ちますが、今は職員から意見を出してもらおう仕組みを考えているところです。失敗してもいいので、何度もチャレンジすることでお互いに意識改革をしていこうと思っています。



佐藤寿彦さん

佐藤(吉) 行政としてその取り組みは当然です。弊社も今年開局45周年を迎え、令和3年にはあすと

長町に新社屋を新築移転します。これを機に会社も生まれ変わるくらいでないといけないので、中期経営計画のビジョンを若手社員に作ってもらいました。

今はその若手で「未来プロジェクト」という組織を作り、「会社のお金とテレビ局の発信機能とブランドを使って、自分たちがしたいことの実現をまず考えてくれ」と言っています。

自分たちが何をしたいか。市役所でやったら、画期的だと思えます。

佐藤(寿) まちづくりという言葉がありますが、さまざまな権限をもっているのは行政なので、規制を解除して、みんなと一緒にやって「やってみる」。仙台市にはできないことをやれば「すごいな、かっこいいな」となりますよ。

深井 塩竈の持つポテンシャルと



佐藤吉雄さん

それを生かすアイデアについてはいかがでしょうか。

佐藤(寿) 塩竈の寿司は有名ですが、しかし庶民には値段が高いと思われています。例えば、気軽に食べられる回転寿司店が数多くあつて、「塩竈の寿司は安くておいしい」と仙台から若い人たちが寿司を食べに来て、帰っていく文化があつてもいいのではないのでしょうか。

佐藤(吉) 寿司に関しては、ブランドینگがうまくいっていて、「東京から寿司を食べに塩竈に行く」というのは有名です。

千年以上前から鹽竈神社があり、いろいろなものが古くから残るテーマパークのようなまちであること、そしてグルメもあるというのは強みです。

ただ、プロモーションがあまり上手でなく、それほど観光資源化されていませんが、強みは絶対生かした方がいいと思います。

市長 アピールの少なさは東北の風土というか、昔はそれで良かったのかもしれないですが、今では通用しません。どうやって若い人たちにチャレンジ精神を発揮してもらえるかですね。

深井 若者の起業についてはいかがでしょうか。

佐藤(吉) 研究開発や一次産業に近いほうが夢がありますね。石巻市などでは地元と都会の若者が水産業の集団を起業しています。

塩竈はそのようなことをしなくても生活できるまちななので、結果的に若者が来ない。一旦発想を逆にしてみた方がいいと思います。

佐藤(寿) 若者を増やすためには、画期的なことをしないと難しいという事ですすよね。

市長 今後どうやってブランドینگし直すか、しっかりブランドデザインを作らないといけないと思っています。

令和3年度からスタートする第6次長期総合計画の審議会を昨年11月に組織しました。審議会には学生の皆さんにも参加していただ



深井ゆきえさん(司会)



▲陸奥国一之宮 鹽竈神社

いており、いろいろご意見を伺いたいと思っています。

深井 塩竈の可能性とは何でしょうか？

佐藤(寿) 海じゃないでしょうか。

佐藤(吉) 今は歴史ブームでもありますが、「海と神社」だと思います。

深井 そこをいかにブランドینگし、発信していくかですね。

佐藤(吉) まちおこしで成功した事例を見ると、参加型の祭りを作って、規模が大きくなって、人が集まってきたりします。

例えば越中八尾の「おわら風の盆」は、地区の住民があつた衣装を着て踊り、大勢の人がそれを見に来る。住民が楽しくて、人が来て



▲「塩竈みなと祭」陸上パレード

くれて、お金も使ってくれたら最高です。

塩竈のお祭りも、みんなが参加する形に作り替えたなら面白いと思います。

市長 鹽竈神社にお参りに来られる方は、車で来てそのまま帰ってしまうので、参拝したら商店街まで来てもらう工夫をしないと、お金を使っていただけません。

御釜神社や酒蔵など、本町界限をどうやって門前町として人に歩いてもらえるようにしていくかですね。

深井 最近は御朱印ブームで若い人たちが神社に行っていますし、

SNSのフォトスペースを作ったら、参拝者が増えたという話もあるようです。

佐藤(寿) 鹽竈神社の御朱印の種類を増やして、何日には特別な御朱印を授与するというのもいいのではないのでしょうか？

それから新しいかっこいいお店をどんどん増やしていけばいいと思います。

議長 地元の商店街の皆さんにも、観光客を迎え入れるために意識を変えていただくことも大事だと思います。

佐藤(吉) 「塩竈応援団」を作ったかどうかでしょう。出身者だけでなく、塩竈にゆかりがあったら応援してね。そういう応援団があってもいいですよ。

佐藤(寿) 市民の人たちも入れて会員10万人を目指す。そうしたら私も「塩竈ファンクラブ」に入ります。コンセプトはみんな考えてほしいじゃないですか。

深井 応援団ができれば、意見を



伊藤博章市議会議長

吸い上げてまちづくりに生かせますね。

これからも塩竈市をみんなが応援し、魅力的なまちづくりを進めていく。本日の座談会の皆さんの思いが一致しました。

市長 今回のまとめとして、若者にとって魅力的なまちづくりを進めていくうえで、「誰が自分か」やるという意識と、「発想」や「変革」が必要であり、塩竈市の個性である「祭り、海、神社」が大きな要素であるということでした。

さらに、門前町や食を気軽に楽しめるようにしていくことや、ファンを増やしていくことなどもご提案いただきました。

今年は第6次長期総合計画策定作業も本格化してきますので、皆さんからのご提案も踏まえて、「魅力的なまちづくり」に取り組んでまいります。

本日はありがとうございました。



佐藤光樹塩竈市長

佐藤 寿彦(G.I.P代表取締役社長)

20代前半の2年間で塩竈市で過ごす。昭和58年、28歳のとき、イベントの企画制作などを手掛ける㈱G.I.Pを設立

佐藤 吉雄(㈱東日本放送代表取締役社長)

塩竈市出身(塩竈二小、一中OB)。大学卒業後、朝日新聞社に入社。おもに社会部記者として活躍。平成28年6月から現職

深井 ゆきえ(元ミヤギテレビアナウンサー)

現在はフリーでリポーター、司会などを務めるほか、コミュニケーションや伝え方の講師として活躍

伊藤 博章

令和元年9月18日第31代塩竈市議会議長に就任(現在6期目)

佐藤 光樹

令和元年9月11日第7代塩竈市長に就任(現在1期目)



▲毎年、春と秋に行われる「酒蔵めぐり」